第56回 メーデーに参加しよう

働くものの団結で 生活と権利・平和を守ろう

働く者の連帯デー
反核平和 「生活と権利」掲げ

前年のメーデーで行進する三池労組の隊列

薫風にはためく組合旗
「団結ガンバロー」の声が新緑の空に高らかに響く――

第五十六回メーデーが五月一日、全国各地の会場に約四百万人が参加して開かれます。

ことしのメーデーは戦後四十年、被爆四十年の節目のメーデーに当たり、働く者の生活と権利、反核・平和が大きな課題。また今回はメーデー発足のきっかけとなったアメリカの〝時短ゼネスト〟から九十九年目を迎え、労働時間の短縮を前面に来年の「メーデー百年祭」を展望したものとなっています。

集会のメーンスローガンには、「働くものの団結で、生活と権利を守り、安心して暮らせる平和で自由な日本をつくろう」が掲げられ、昨年十九年ぶりに削除された「生活と権利」が復活し、「自由」が新登場。また東京の中央会場では、昨年簡素化のため中止されたメーデー会場での政党代表あいさつも復活し、全野党のあいさつを受けることになりました。

メーデーの参加者は、全国約千二百二十会場で四百万人を上回るもようです。

今日、メーデーは〝働く者の祭典〟としてきわめて盛大になってきています。しかし、メーデーの起源をたどると、それはたんなる祭典ではなく、アメリカの〝八時間要求ゼネスト〟をきっかけとする国際的な労働者連帯デーとして始まっています。

さらにメーデーは、その時代の反映として、労働運動にとって重要な生活課題や政治課題を掲げてきました。例えば戦前では八時間労働制の実現やファシズム粉砕などが掲げられ、戦後では「安保条約反対、岸内閣打倒」(五九年)、「社会保障の充実」(七九年)などが登場します。

今回のサブスローガンは「時短」「賃上げ」「減税」をはじめ護憲、反核、平和など十一項目。

国際連帯の日の五月一日、メーデーの歌声を日本の、世界の空に高らかにひびかせましょう。

メーデー・クイズ

〈1〉日本最初のメーデーは一九二〇年(大正九)年五月二日でした。一日でなく二日にした理由は?――①雨天順延。②二日が日曜日だった。③弾圧を狙っていた警察のウラをかくため。

〈2〉日本最初のメーデーは東京で行われましたが、その会場は?――①日比谷公園。②芝公園。③上野公園。

〈3〉日本のメーデーは一九二〇年の第一回から今年で六十六年目。ところが今年のメーデーは第五十六回。十回足りないのはどういうわけ?――①戦争中、十年間禁止された。(2)全国的な悪天候で中止したことが十回あった。③初めの頃は一年おきに開いていた。

〈4〉昨年、日本で開かれたメーデーはほぼ何カ所でしょう?――①約七百カ所。②約千二百カ所。③約二千カ所。

〈5〉昨年のメーデーに参加したのは、全国で何人くらいでしょう?――①二百万人。②約四百万人。③約六百万人。

解答――
〈1〉―③　〈2〉―①　〈3〉―②　〈4〉―①　〈5〉―②

メーデー案内

大牟田地区　笹林公園　午前10時
前夜祭市民会館30日午後5時30分
荒尾地区　競馬駐車場　午前10時
前夜祭労働会館29日午後5時30分

三池炭鉱の歴史の中から

その四 第六回

職制の媚態

武松輝男

労務政策というものは不思議なる魔力をもっているものだと思っている。その魔力というのは、被害を受ける労働者の中にはあまりあらわれてくるものではないらしくて、むしろ、末端職制などの中間管理職に顕著に現れてくるもののようである。

加害というのは被害の裏がえしではないかと思うことがよくあるが、上役に弱くて部下に強い者が出世するという諺みたいな言い伝えが、そのことをよく言い当てているのではないか、と思うのである。

宴席などに連らなってみると、一番最初に上役に盃を持っていってペコペコしているのをよく見かけるが、酒がまわって座がくずれてくると、そういう者に限って部下をつかまえ、呂律の回らない舌で説教しているものだ。なにも酒の席にまで上司風を吹かせる必要もあるまいと思うのだが、だがここで部下が刃向かうと、事が面倒になる。

三池炭鉱では、このような酒の上の刃向かいで配転させられた者もいたぐらいだから、酒の上のことで、といった免罪符は通用しない。

こうなると、媚びるほかにうつ手はない。それを媚態というか、あるいはへつらいというか、その言いかたはどちらでもよいが、そういう媚びる話なら、三池炭鉱には掃いて捨てるほどある。

世の中とは不思議なもので、こういうへつらいの話だけがきわだった人がいるものだ。その人の話によると、ある者は、上司の魚釣りにいつもお伴をして、餌づけから釣り上げた魚の仕末までやって出世したとか、またある者は、鴨撃ちの好きな上司についていって、撃ち落とした鴨を犬よりも早く取ってきたとか。もっとひどいのになると、高射砲とかいう銃身の長い、つまり射程距離の長い銃を船の舳先に取り付け、上司を招いて鴨撃ちをしたとか。もちろんこの人は相当に高い地位まで出世したとかいうことである。

このようなへつらいの話を、なかば笑い興じながら聞いているのだが、ふと笑いを止めて真顔になってみると、へつらいには自己主張が全くないことに思い当たる。

媚びるとか、あるいはへつらうとかは自己を捨てることからはじまるが、非常に困ったことに、そういうタイプの人は、こんどは部下にその媚びを求めることである。

正月の祝い酒で、上司の悪口を言った者が、思想が悪い、反抗的だという烙印を押されて外地へ転勤を命じられた話など、その最もたるものであろう。

しかし、どう考えてみても人間としてやるべきことではない。ある職制は労務管理を徹底させるためのものだといって、宴席で息巻いたものだが、それは労務管理というものではない。

従業員の指摘、苦情などには一切耳をかさない。改善提案にしても意図的な振り分けをおこない、都合のいい部分だけを取り上げるというのであれば、それは労務管理が形骸化しているからだと言うほかはあるまい。

三池炭鉱で年間死亡者が八十人を超す災害が戦後に集中しているが、有明災害でいみじくも露見したように、保安上の再三の要求にも全く耳をかさなかった、という告発の事例の中に、魚釣りや鴨撃ちなどという、職制自体の労務管理の原点を忘れた自己保存の本能から醸し出す媚態と、その裏がえしの被害をみることができるのではないか。

(カットも筆者)

裁判闘争の終盤迎え
苦難の歴史を語り合う
遺族会が団結旅行

十五回目をかぞえる三池遺族会の団結旅行が、四月七日あいにく終日雨に降られましたが、熊本県天水町小天温泉の那古井館で五十七人が参加して催されました。

那古井館は、夏目漱石ゆかりのひなびた湯の宿で、峠の茶屋とともに『草枕』の舞台となったところです。

九時すぎに組合事務所を出発して小一時間で到着、さっそく溝口会長のあいさつがあり、組合から田口書記長、弁護団から本多先生のあいさつを受けました。

そのあと昼すぎまで、終盤に近づいた裁判のことや、和解打診の問題などについて真剣な質問や意見が交されました。爆発から二十一年余り、提訴いらい十一年余の怒りと悲しみ、苦労をこもごも語り合いながらこんごの決意を誓う場になりました。

会食に移り、和やかに歓談したり、歌ったり、踊ったりでしたが、偶然に隣りの会場には玉名退職者の会の総会に参加された顔見知りの方がたが居合わせ、後半はお互いに交流の場となりました。

21年余の苦難のあとを刻んだ歴史をふり返りながら、団結してがんばろうと決意を誓い合った。(那古井館で)

原告団臨時総会のお知らせ

日時　四月二十一日(日)　午前十時
場所　荒尾市公会堂